

問一

近代科学は、観念的な思考から経験の観察への転換により生じたと見なされがちだが、実は雑然とした日常的経験に依拠してきた認識への疑念に由来しているから。

（解答欄 3 行）

問二

実験は、雑然たる日常的経験をただ観察するのではなく、原理的構想の妥当性を検証するために条件を整え、人が感受するものを装置によって数値的に把握することで正確に理解しようとする、人工的な経験であるから。

（解答欄 4 行）

問三

日常の経験に科学的検討を加えた寺田の研究には、華やかで心躍る魅力を湛えた経験をいとおしみ、世界の単純化と抽象化による近代科学からそれらが捨象されてしまったことを残念がる気持ちがうかがえるという意味。

（解答欄 4 行）

問四

トレスアン伯爵の議論は、物理学研究に見せかけてはいても、実際はあくまで直観に基づく推論に過ぎず、日常的経験から離脱した近代科学の言説とは言えないから。

（解答欄 3 行）

問五

日常的経験から離脱し、同時代の学問水準に達するところまで抽象的な科学の探求を進めたうえで、そうした営みの過程を振り返り、意図的に捨象してきた日常の具体的な経験も科学的に捉え直し、人間文化のなかで科学が示しうる新しいあり方を模索していくという営み。

（解答欄 5 行）

問一

本になつた詩は永続性をもつという俗見は、詩の本質は消滅するところにあるということを見誤っているから。

（解答欄 2 行）

問二

長期にわたる個人的経験や社会性とは別に、日常における生理的反応だけで詩への感動を捉えようとする見方。

（解答欄 2 行）

問三

文字化された時、個人の内的経験としてあつた詩は、人びと相互に開かれていく可能性を持つということ。

（解答欄 2 行）

問四

文明が進展するなか、文字化された詩は、人びとに共有されていく過程で言語構造全体との関わりを強めていくので、詩のそうした社会的価値は、個人的関心だけで安易に生成消滅を言うことはできないということ。

（解答欄 4 行）

問五

詩は個人的なものであるとともに社会的なものでもあり、その本質は消滅することで新たな詩を誕生させるところにこそあるので、ある詩がその社会的価値を失うという事態は、過去から蓄積されてきた言語の構造が新たな可能性へと開かれたことを示しているから。

（解答欄 5 行）

問一 三

一見道理から外れた表現で、富士山の雪が年中消えないことへの素直な感動をあらわしている「情」。
（解答欄 2 行）

問二

富士山の雪が年中消えないことを「六月十五日にも消えない富士の白雪」と詠んでいるとしたら、通り一遍の歌人であろう。
（解答欄 3 行）

問三

富士山は高いので雪が消えにくく、一年でもっとも暑い六月十五日に消えて、その夜にはすぐ降り積もるから雪の消えた時が見えないのだろう。
（解答欄 3 行）

問四

赤人の歌の表面的な語句の解釈に終始し、歌に込められた作者の感動には気づかない万葉集注釈者たちの愚かさ。
（解答欄 2 行）

問五

ものの道理がわかっているにもかかわらず、理屈っぽく自分の知識をひけらかしたりせず、幼子のような気持ちになっても、常識で考えたと起こりそうもないことであっても、素直に感じたままの心情を詠んで人が感動するもの。
（解答欄 4 行）